

バッテリー

2007(平成19)年2月2日鑑賞(東宝試写室)



監督＝滝田洋二郎／原作＝あさのあつこ『バッテリー』（角川文庫刊、教育画劇刊）／出演＝林遣都／山田健太／天海祐希／岸谷五朗／菅原文太／鎗田晟裕／萩原聖人／岸部一徳／米谷真一／太賀／蓮佛美沙子／濱田マリ／渡辺大／関泰章／塩見三省（東宝配給／2006年日本映画／119分）

……中学1年生の孤高のピッチャー巧^{たくみ}とその剛速球を受けるキャッチャー豪^{ごう}とのバッテリーを主人公に描かれる人間ドラマは、さすが滝田洋二郎監督作品、といえる出来。巧と病弱な弟青波^{せいば}との確執（？）は、野球に八つ当たりする母親にも一因あり！ 一見危うい家族の絆だが、往年の高校野球の名監督であった祖父の影響もあり、いつの間にか再び野球が家族を結びつけることに……。テレビゲームばかりに熱中している子供たちに是非薦めたい感動作だが、そのためにはまず両親が……。

🎬 『タッチ』『ラフ』そして『バッテリー』

あだち充原作の大ヒットコミック『タッチ』と『ラフ』が先に映画化されたから、『バッテリー』のあさのあつこも自分の作品の映画化を待っていたはず……？ 『タッチ』（05年）は、夏の高校野球の季節を迎えて、甲子園を目指す達也と和也という双子の兄弟が主人公だが、2人の幼なじみの美少女、南役として長澤まさみを登場させたところがミソ……（『シネマルーム8』196頁参照）。

また『ラフ』（06年）は、水泳部で高飛び込みの選手であるヒロイン長澤まさみと、競泳選手の男の子とのライバル物語だが、もう1人高飛び込み女子日本チャンピオンの市川由衣まで登場させ、2人の美女の美しい水着姿を拝めるところがミソ……？ はっきり言えば、おじさん族にとって何ともしばらしい目の保養になるのが『ラフ』の魅力……？

それに比べれば、本作は、中学生野球におけるピッチャーとキャッチャーのバッテリー2人が主人公だから、大会の規模も登場人物ももともと少し地味……？ したがって、映画化が3番手になったのはやむをえないかもしれないが、そこに登場する天才ピッチャー原田巧（林遣都）の投球術は中学1年生ながら、ひょっとして『タッチ』における明青学園高校のエース和也くんより上……？ 私たちにそう思わせるほど、スクリーン上で見せる巧の球は、速くて重い……？

兄弟の確執は……？

西川美和監督の『ゆれる』（06年）ほど深刻ではないにせよ、本作でも、ピッチャーとして絶大な自信を持つ兄の巧と、生まれつき病弱で野球などとてもできない弟の青波（せい は 鎗田晟裕）との兄弟の確執はあるよう……？

と言っても、巧の中学入学を控えた春休み、父親の広（岸谷五朗）、母親の真紀子（天海祐希）と共に、岡山県にある真紀子の父親、井岡洋三（菅原文太）の家に引っ越してくる巧、青波兄弟の確執はまだまだ小さいもの……。反抗期にはちと早いかもしれないが、野球に打ち込む巧が、甲子園出場校の有名監督だった洋三とこれから接していけば、自然に反抗期も収まるかもしれないし……。

野球へのヤツ当たりはダメ……

広は野球には全く興味がなく、絵の才能があるらしいが、しっかり者の真紀子には全然頭があがらない様子。また、映画全体を通じて渋い味を出し、存在感たっぷりの演技を披露し、ストーリー構成までリードするのが菅原文太扮する洋三だが、彼も実の娘の真紀子には頭があがらない様子。したがって、原田家を仕切るのは当然真紀子となるが、この母親は病弱な青波に対して、猫かわいがり的なやさしさを示しているところが気になる点……。

いくら病弱でも、お兄ちゃんと一緒に野球をしたいというのは仕方がないのに、野球をして熱を出した青波の看病をしている真紀子が、巧に当たっている姿を見ると、野球そのものに当たり散らしている感じ……。テレビドラマでさっそうと女弁護士役をやっていた天海祐希なら、そんな野球へのヤツ当たりが結果的に巧の心を傷つけることになることはわかりそうなものだが……？

■ 小6から中1は、少し不自然……？

本作のような年齢限定作品（？）では、どうしても起用する俳優が限定されるのが映画化の難点。その点、中国の張藝謀監督は、『あの子を探して』（99年）での魏敏芝、『初恋のきた道』（00年）での章子怡、『至福のとき』（02年）での董潔と、新人発掘の天才だったが、本作では原田巧と永倉豪役のオーディションにはかなり苦労した様子。特に豪役となった山田健太は現役の野球部員だったから、この映画のために「最後の夏」を諦めさせるのにかなり苦労したとのこと。

これでわかるように、オーディションで抜擢された2人は共に14～15歳の中学3年生。ところが、映画の設定は小6から中1になるところから始まるし、野球部に入り本格的にバッテリーを組んだ2人の物語が展開されるのは、中学1年生の時。大人になってからの2年の差はほとんど関係ないが、中学3年生と1年生とでは、体格においても物事の考え方においてもやはり大違い。原作がどうなっているのかは知らないが、視覚効果が大切な映画では、本格的な投球術を見せるためには、俳優の年齢に合わせて中学3年生の設定にした方がよかったのでは……？

■ 孤立の人 or 孤高の人……？

所詮中学野球レベルではチーム全体の和が大切だから、巧のようにいくら野球センスが抜群で、剛速球を投げることができても、下手をすると孤立してしまう危険性がある。プロ野球がキャンプインした2月1日、オリックスの清原和博が1人だけトレーニングウェアで参加したことが問題となった。その原因は「事務的なミス」とされたが、実はそれは原因の1つにすぎない。ホントの問題は、なぜ正規のユニフォームでという指示がスムーズに清原に伝えられなかったのかということ。つまり、チーム内で清原が孤立している存在だということが、この「事件」によって明らかになったわけだ。他方、今や大リーガーとして大成功を取っているシアトル・マリナーズのイチローは「孤高の人」と表現されて別格扱いだが、その意味するものはかなり複雑……？

新田東中学野球部に入り、数球テスト投球しただけで、即レギュラー入りを保証されたも同然の巧は、孤立の人、それとも孤高の人……？

野球部監督はチョイ悪風……？

安倍晋三政権の下で鳴り物入りで設置された教育再生会議の第1次報告が去る1月24日に出された。わが国の現状に照らし、本格的かつ長期的な教育再生が焦眉の課題であることは明らかなが、新田東中学校の職員室や野球部監督の姿を見て、まず私は「これでは……？」とってしまった。

まず、巧が登校初日に出くわしたのが、「風紀係」による服装と手荷物検査。戦前の憲兵でもあるまいし……。また、口ひげをたくわえた野球部監督の戸村真（萩原聖人）はチョイ悪風というよりヤクザっぽい教師だが、1人突出した存在の巧をどう扱ったらいいのかわからず持て余し気味……。そのうえ、「あんた俺の球を打てるのか？」と巧から挑発されて、それに応じるところなどはまるでガキ……。もっとも、それは表面上の姿で、実は戸村は洋三監督の教え子だった野球選手で、巧の育て方について洋三に相談にきたのは立派。野球監督としては優秀なピッチャーは喉から手が出るほどほしいが、逆に問題児は願ひ下げ……。さあ、戸村はどんな手綱さばきで、野球部をまとめていくのだろうか……？

ここにも「いじめ」が……

ピッチャーは「俺が大将」型で自己チュータイプの人が多いのに対し、キャッチャーは参謀型で気配りタイプの人が多いのは、野球が集団のゲームであることを考えれば当然。そして、巧と豪は典型的なそんなバッテリー。したがって、実力的にはともかく、豪の友人で①お寺の息子のくせに幽霊が大の苦手の沢口文人（米谷真一）、②寿司屋の息子で店の宣伝上手な東谷啓太（太賀）などが野球部に入り、活動できているのは豪のおかげ……？

他方、中1ですぐにレギュラーの座が約束される者もいれば、中3になってもまだ中途半端な選手もいる。それが中3のA君で、彼は風紀委員としても活躍して（権力を振るって）いた……。そんなA君にしてみれば、巧の登場は面白くないに決まっているから、2人の対立は徐々にエスカレートし、ついに……？

ここで、A君としか書けないのは、この映画をあくまでさわやかな青春ドラマ、家族ドラマ、感動ドラマとして表に押し出していく以上、中学校や野球部で起き

るいじめ問題をあまり強調したくないためか、プレスシートには彼の名前が載っていないため……。しかし、陰湿ないじめの実態は直視すべきもの。惨めな姿となって、「受験、受験と責めたてられる中で野球部に入ったのは、推薦を受けて、入試を有利にするためだ。野球部になんか、何の愛着もあるか！」と叫ぶA君の心の中も見なければ……。その意味で、A君による巧や沢口に対するいじめも悪いが、その根本原因に何らメスを入れることができなかったA君の担当教師や野球部監督、そしてこの不祥事の処分についてあくまでコトなかれ主義を押し通す新田東中学校校長（岸部一徳）も、しっかり自らを反省しなければ……。

ヒロインは少し魅力不足……？

長澤まさみ主演（？）の『タッチ』『ラフ』では、当然淡い恋模様が1つのテーマとして描かれたが、『バッテリー』では主人公が中1という制約（？）もあり、恋模様はほぼ封印……。しかしそれではあまりに味気ないと思った滝田洋二郎監督は、巧のクラスメートの女の子で風紀委員の矢島蘭（蓮佛美沙子）を登場させて、ほんの少しだけ、恋模様の味付けをしている。今ドキの中1生は、堂々と彼女、彼氏と手を組んで歩いているのかもしれないが、この映画ではせいぜい巧と蘭は電話で話す程度で、それ以上の進展はなし……。？

それはそれでいいのだが、私が不満なのは、この蘭役の蓮佛美沙子が2005年「ミス・フェニックス」グランプリを獲得した女の子であるにもかかわらず、少し魅力不足なこと……。？ もっとも、これは単なる私の好みにすぎないが……。

佐々木小次郎の登場！

戸村監督に洋三が語るのは、「巧の野球は、孤独の証じゃ」ということ。また、この言葉を風呂場の中で湯船に浸かりながらじっと聞いていたのが広と青波。コミックながら、菅原文太が語るこの「野球哲学」は重みのあるもので、この映画がラストで大きな感動を迎えるうえで大きな要素となっている。

他方、孤高のエースがいれば、そのライバルとして天才4番バッターの登場が望まれるもの……。巧を名もなき素浪人、宮本武蔵とすれば、さしずめ名門、横手二中の4番バッター門脇秀悟（渡辺大）が佐々木小次郎……。？

本物の佐々木小次郎にはマネージャーがいなかったようだが、この門脇君には、彼の幼なじみで5番バッターの瑞垣俊二（関泰章）といういいマネージャーがいた。そのため、A君のいじめを原因とする不祥事のため対外試合を禁止されてしまった戸村監督とこの瑞垣との交渉によって、巧と門脇との1打席だけの対決が実現することに。もしここで巧が勝てば、戸村監督の責任において、新田東中と横手二中の夢の対決が実現するという約束だが……。

豪君にも悩みが……

いつもニコニコしながら周りに配慮している豪君はキャッチャー向きだが、そんな彼にも大きな悩みが……。その第1は、野球は小学校まで、中学からは学業優先という母親との約束を守るべきか否かということ。巧が現れなければ、すんなり約束が実現されていたはずだが、巧の登場で豪君の人生も狂ってくることに。そのため豪君の母親永倉節子（濱田マリ）は巧に対してかなりおかんむり……？

第2の悩みは、天才ピッチャー巧との能力の違い。つまり、巧の投げる球をどこまできちんと捕球できるかという問題で、これは深刻……。並の対戦相手であればそんな問題点は表面化しないが、強豪横手二中の名参謀、瑞垣君は、巧が門脇相手に全力で投げた球を豪がキャッチすることが難しいことを見抜いてしまった。そこで瑞垣君が出した指示は、「振り逃げをしろ！」というもの。「そりゃ、汚いよ」と思わないわけではないが、それは、きっとあの知将野村克也監督の『野村ノート』にも書いてあるはずの、勝つための当然の戦法……。

連打されたこともなければ、満塁ホームランを打たれたこともない巧にはじめて訪れた試練だったが、そこで巧が選択した手段は……？ そんな行為が決定的に豪のプライドを傷つけ、2人を仲違いさせてしまうことになることは、少し考えればわかりそうなことだが……？

原田家最大の危機が……

今、青波は意識を失ったまま病院のベッドの上に……。青波なりに野球を楽しんでいたのはいいのだが、真紀子が心配していたとおり、やはり生まれつき病弱な身体はそれを受け入れなかったよう……。青波の傍で心配そうに見守っている

真紀子は、たぶん徹夜続き……？ そんなイライラもあり、真紀子はユニホーム姿で病室を訪れてきた巧に対して「出て行って！」と怒鳴ってしまったから、今や原田家の家族の絆はもうバラバラ……？

そんな最大の危機の中、それまであまり存在価値を示すことがなかった父親の広が、「巧にとっての野球は、祈りだと思わない？」と何とも意味シンな言葉で、静かに真紀子に語りかけていったからビックリ……。ここまで説得力ある説明をされると、真紀子だってもちろん巧を憎んでいるわけではないから、巧や野球に対して八つ当たりしているだけだということに気づいたのは当然……。

そして今日は、横手二中に惨敗を喫した新田東中のリベンジの日。本来許されていない対外試合ながら、双方ユニフォームを着用しての「関ヶ原の戦い」だ……。そんな試合に臨む巧に対して、それまで意識を失っていた青波の口から、「勝ってな……お兄ちゃん」の言葉が……。

さて、大団円は……？

本作をここまでまじめに評論してきたのは、フィナーレの大団円が結構感動的だったから……？ ハイライトとなる新田東中 vs. 横手二中の試合が撮影されたのは、原作のモデルともなった岡山県的美作中学校とのこと。青波の言葉を胸に病室を飛び出した巧は、必死に自転車を飛ばしたが、試合は既に開始しているはず。当面は控えピッチャーでしのいでいるとしても、早く巧が到着しなければ……。

そんな巧の到着により、試合はタイムが宣言され、さあいよいよ準備の整ったエース巧の登場だ。もちろん、それを見守る数少ない観客は、巧の登場を今か今かと待ちかねていた広と洋三。さあ巧の第1球は……？

そんな時、投球動作を開始しようとしていた巧の耳に入ってきたのは、「フレーフレー、巧！」という女性の大きな声……。さてこれは一体誰……？ それは言わずと知れた○○の声……。巧は野球の申し子かもしれない。したがって野球が原田家を一時的にバラバラにしたことがあっても、最終的には野球が原田家の家族の絆をしっかりと固めることになったわけだ。そんなフィナーレには、率直に誰もが感動を覚えるはず……。

2007(平成19)年2月7日記